

ミュージアム 通信

未来を拓く 工芸の世界へ

[作品展示会のご案内]

「『未来の匠』展

—Shapes and Colors—」開催

[企業史コラム4]

もうひとつの化粧史

—伊勢半グループ製品の今昔—

[かわら版]

開館時間変更のご案内



「山海名産尽 加賀ノ雪」—勇齋国芳 画・国立国会図書館所蔵
諸国の風土や特産品を描いた揃物のひとつ。

未来を拓く工芸の世界へ

伝統から生まれた
新境地

「伝統工芸」と聞くと、少し堅苦しく何となく自分とは違う世界の話という印象を持つ人も少なくないのではないだろうか。だが、この通信を毎号楽しみながら読んでくださる方は（きっと）伝統や工芸といった類に対する知識も長けた読者が多いであろう。今号は、前者のような人にこそ読んでいただき、伝統技術を踏襲しながらも独創的な作陶の世界を知ってもらいたい。

ここという「伝統」とは、長年にわたって継承されてきた先達の技術・技法を守り再現すること、と勘違いしてはいけない。伝統的な技をベースとして、どう展開させていくか、どのように今の時代に合ったものを創造していくのかというところが「伝統」なのである。漆器や陶磁器、織物、染物、和紙、金工品など、

長い歲月の中で日本人の暮らしに息づいてきた伝統工芸という枠を超え、独自のセンスで作品づくりを行う二名の作家を紹介するとしよう。

工芸が盛んな石川の地で、従来の形式や型を大切にしつつもそこに捉われることなく、自由な感性そのままに作品を生み出す。そんな陶芸界の「未来の匠」が、伝統から芽吹いた新たな工芸の世界を私たちに教えてくれるに違いない。

今村公恵の 色絵とかたち

「幼い頃、よく母の友禅染の多彩な色使いを組み合わせて遊んでいた」。もともと絵を描くことやものを作ることが好きで、さらに呉服屋の娘として綺麗な色の着物や反物を身近にしたことが今の作風にも繋がっていると話す。九谷焼ならではの独特の色をテンポ良くパッチワークのように組み合わせ

せていく。この九谷五彩といわれる赤・黄・緑・紫・紺青の基本色によって描かれる上絵こそ、誰しもがイメージする九谷焼の特徴であろう。主張の強い



これら色同土を喧嘩させることなくむしろ互いを引き立たせる配置とデザインで描かれる様は自由で独創的だ。九谷焼発祥の地・加賀市大聖寺に生まれ育ち、暮らしの中で日常的に使われる九谷焼にも慣れ親し

んでいた。そんな今村氏が友禅染と九谷焼の二つの伝統を通して得た色遊びの感覚は独自のスタイルである。

色で遊ぶだけでなく、彼女の作風のもうひとつの特徴ともいえるかたち。短大の陶芸コースで焼物の基礎よりもオブジェや作品を作ることを優先して教わったことが今の作陶に大きく影響しているという。思わず手に取ってみたいくなるその不思議な動きのある形状と、その後九谷焼技術研修所で学んだ基礎を、師につかず独立独歩で展開させる有りようは、まさに彼女が創り出す次世代の陶技である。



中田雅巳の「SEN」

一ミリにも満たない線をフリーハンドで一定の細さと間隔で掻き落とししていく。気の遠くなる作業だ。「SEN」シリーズと呼ぶその名の通り、線の特徴とした作風はスタイリッシュで、現代の暮らしの中でも和洋問わず違和感なくすつと馴染んでくれる。すべてが直線的でクールな印象を与えるが、どこか温かみを感じさせるのは機械的ではない丁寧な手仕事による自然な線だからこそであろう。

中田氏は、九谷焼に使われる陶土を使用するが、特徴的な色絵や技法を作品に取り入れてはいない。まず白い土でかたちを作り、その表面に黒い化粧土を重ねる。針で線をなぞっていくと、

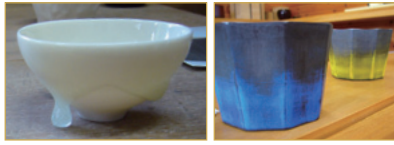


下地の白がみえてくる。この黒と白のシンプルな作品も線の美しさを一層引き立たせているが、掻き落としした線に色を埋め込んでいく「象嵌」と呼ばれる工芸技法を盛り込んだ作品もまた違う味わいを楽しませてくれる。



右下にみえる針で線掻きを行う。一本でも失敗すると、その作品は破棄してしまう。

た父親の影響が大きい。絵を描くことより粘土でかたちを成形することが好きだったという彼の工房を訪ねると、一人の作家がこれだけの作風を同時に作り上げるのかと驚くほど、SENシリーズとは全く印象の異なる造形作品の数々が並ぶ。固定した考えは持たず、その時に自分が面白いと感じたものを作っているだけと話す。求められるものではなく、自分が作りたものを作るという伝統に縛られないスタイルとセンスで、彼独自の新しい工芸の世界を広げている。



伝統工芸を

もっと身近なものに

二名とも、その作風から分かるように、伝統をふまえた工芸を展開さ

せ、自分のものにし、新たな表現を創造している。それは機能やその利便性を求める無味乾燥な大量生産品とは違う工芸品ならではの豊かさや潤いを私たちの暮らしに与える。もちろん感じ方は人それぞれだが、「工芸」や「伝統」という言葉がもたらす既成概念に捉われず、純粹にモノを楽しむことを知り、日常に自分の好みに合った伝統工芸品を取り入れてみていただきたい。工芸品は、絵画などの芸術作品とは違い、実用品・日用品の中に芸術的な意匠を凝らしたものである。使えば使うほど、個々の味わいが増す。取り扱いを恐れず積極的に使う楽しみや愛でる喜びを味わえば、どこか堅苦しい印象だった伝統工芸も身近に感じることができるようだろ

■ 作品展示会のご案内

伝統技を礎に、革新を追及した作陶美の世界

「未来の匠」展 - Shapes and Colors -

■ 2015年1月14日(水)～2月22日(日)開催



今村公恵作 出品作品(一部)



中田雅巳作 出品作品(一部)

今回の開催で四回目となる「未来の匠」展。江戸時代から続く紅作りの技と文化を守り伝える伊勢半本店が、工芸の世界で技を継承すべく日々研鑽を重ねる若手作家を支援したい思いからはじまったこの企画。来春は、独自の作風で新たな工芸の世界を楽しませてくれる作家二名の作品展示会を紅スペース(入館無料)にて行います。ご紹介

今回の開催で四回する作家は、九谷焼の鮮やかな色彩をポップに組み合わせた紅作りの技と文化を守り伝える伊勢半本店が、工芸の世界で技を継承すべく日々研鑽を重ねる若手作家を支援したい思いからはじまったこの企画。来春は、独自の作風で新たな工芸の世界を楽しませてくれる作家二名の作品展示会を紅スペース(入館無料)にて行います。ご紹介

今回の開催で四回する作家は、九谷焼の鮮やかな色彩をポップに組み合わせた紅作りの技と文化を守り伝える伊勢半本店が、工芸の世界で技を継承すべく日々研鑽を重ねる若手作家を支援したい思いからはじまったこの企画。来春は、独自の作風で新たな工芸の世界を楽しませてくれる作家二名の作品展示会を紅スペース(入館無料)にて行います。ご紹介

今回の開催で四回する作家は、九谷焼の鮮やかな色彩をポップに組み合わせた紅作りの技と文化を守り伝える伊勢半本店が、工芸の世界で技を継承すべく日々研鑽を重ねる若手作家を支援したい思いからはじまったこの企画。来春は、独自の作風で新たな工芸の世界を楽しませてくれる作家二名の作品展示会を紅スペース(入館無料)にて行います。ご紹介

作家に学ぶ体験講座

■「線象嵌」体験講座

2015年2月7日(土) 講師: 中田 雅巳氏

■「九谷焼絵付け」体験講座

2015年2月14日(土) 講師: 今村 公恵氏

■時間: 各回 ①10:30～12:00 ②14:00～15:30

■定員: 各回8名(定員になり次第、受付終了)

■参加費: 3,500円(材料費込み)

※ご予約は紅ミュージアム(03-5467-3735)まで。

—伊勢半グループ製品の

今昔

—「エリザベスアイリッド」

目は口ほどにものを言うといわれる。二皮目ともいわれていた二重まぶたと、一重まぶたでは顔の印象が違って見えるが、近代以前は二重まぶたを美しいものとして捉えてはいなかったようだ。日本人の二重まぶたに対する美的価値観はいつから生まれたのだろうか。

西沢一風(一六六五—一七三二)の浮世草子『新色五巻書』(元禄一年・一六九八)には、「情らしき二皮目、鼻筋通りて卑しからぬは壺口」の一文がある。これは(宮芝居の女舞の顔が)色っぽい二重まぶたで、鼻筋が通っていてかわいらしいおちよぼ口だという意味である。他にも江戸時代の書物では、女性の「二皮目」はなまめかしい性的魅力を表すものとして記されていることが多い。日本近代文学者の青

山英正氏は、論考の中で「前近代の日本人は二重まぶたというものを、性的エネルギーをも含んだ生命力の表れであると見なしていた」と結論付けている。こう見ると、日本人は案外昔からその美醜に関係なく、二重まぶたから人間の活力や魅力を見出していたようだ。

その後、近代になり欧米化が進むと二重まぶたはすっかり美的要素のひとつとなる。そして昭和六年(一九三一)には、整形手術をすることなく一重を二重まぶたに矯正できる「アイホーン」という美容器具が登場する。さらに昭和三八年(一九六三)、美容業界から、もっと気軽に二重まぶたになれる接着式の形成用材が発売された。しかし、これらの商品はいづれも美容用品としてエステサロンや百貨店などで高価格で

販売されていた。

さて、この接着タイプの二重まぶた形成用材を初めて化粧品として登録し、安価で売り出したのが昭和四二年(一九六七)三月発売の「エリザベスアイリッド」である。香料・防腐剤などの余分な成分は入っていないシンプルな処方、現在も人気のロングセラー商品である。

昭和四二年といえば、ツイギーが日本に來日した年で、この年はまぶたの際とアイホールに二重にアイラインを描くダブルラインというメイクが大流行した。欧米人の彫りの深い顔立ちにこぞって憧れた時代である。二重まぶた形成用材は、まだ世間では化粧品として認識されていなかったため発売前の内部会議で、「このような特殊商材を売る気がしない」という反対意見も出たが、



エリザベスアイリッド
昭和四二年(一九六七) 6000円

当時の社長の英断で発売に踏み切ったところ、発売当初から売り切れが続出するほど大ヒットした。

弊社エリザベスは、昭和九年(一九五四)に設立し、本年度六〇年を迎える。これまでアイリッドのような時流を読んだ商品を数多く排出し、現在も挑戦を続けている。

※1 男性の二重まぶたは、出世や人生の成功と結び付けられていた。

※2 「ことばと文化のミニ講座」三九日本人は二重まぶたをどのように見ているか(明星大学二〇〇九年)

Information

かわら版

紅ミュージアム開館時間変更のお知らせ

2014年11月より、紅ミュージアムは以下のとおり開館時間を変更することとなりました。

開館時間/10:00~18:00(入館は17:30まで)

休館日に変更はございません。また、企画展開催時は開館時間を延長する場合がございます。ご来館の際は、開館時間をご確認の上お越しください。

Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/10:00~18:00 ●休館日/毎週月曜日 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>